

三段階方法論 “か・かた・かたち”を解く

菊竹清訓

日時：2008年6月7日(土)13:30～
場所：INAX：GINZA 8F セミナールーム



Part-1 まず、はじめに

fig.1

私は最近、アメリカに行きまして、MITとニューヨークで2つの打ち合わせをしてきました。その帰国直後に、この講演会が決まったと言われまして、どんなことをお話したらいいかと考えました。今日は基本的に建築の考え方に関して、あまり難しい話はさておいて、テーマを“住宅”に絞って述べさせていただこうと思っております。住宅の話は“か・かた・かたち”の方法論にとって大事だと思います。最近、住宅は形式論が多くなっていますので、方法論にとって大切な点をお話して、ご参考になればと思います。また、最近私の話は飛躍が多いようで、分かりにくいこともあります。飛躍するのではなく、自分で分からないことは飛ばしているんじゃないかとも思いますが(笑)。

いずれにしても何か問題がありましたらご質問下さい。最初に大体40分ほどお話をし、途中で10分くらい休憩をいたしまして、あと40分ほど後段のお話をしたいと思っています。40分というのは、15年くらい前ですが、アメリカの南の方のフロリダから最後はハーバード大学まで、6大学で方法論のことを講演して回ったことがあります。その時、アメリカの学生の耐久力というのは40分が限度、40分を過ぎると飽きてしまうと言われました。飽きられても困りますので、じゃあ大体40分くらいでお話しようということで話をしました。今日も前後2つに分けて、それぞれ40分くらい



■1

でまとめたいと思っております。

最初に概略として、1970年代以前のコンセプトをつくった時代のお話をして、次に、これからの日本の建築は一体どうなっていくかというお話をします。また、海外の事例なども少しお話してみたいと思っています。

Part-2 方法論について

まず最初に、どうして方法論、あるいは方法ということを考えるようになったのかということから話を始めます。

2-1 武谷先生との出会い

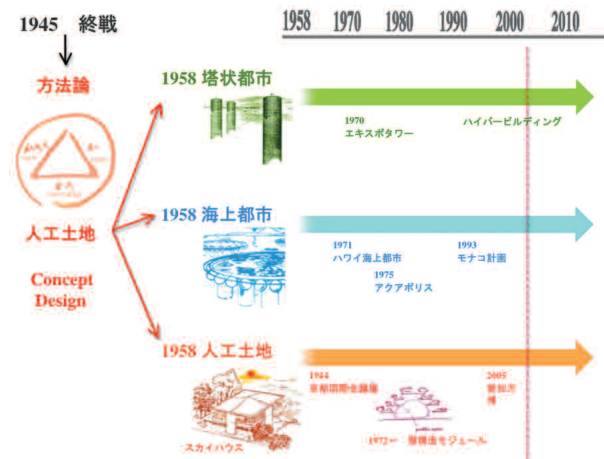
fig.2,3

武谷（三男）先生は、京都大学の原子物理学の理論的グループの1人です。先生は私の郷里のすぐ近くでお生まれになった方です。そのこともあって、武谷先生の湯川中間子理論の発見に至った武谷三段階論を読んで、率直に意見を述べようと武谷先生のもとをお訪ねいたしました。

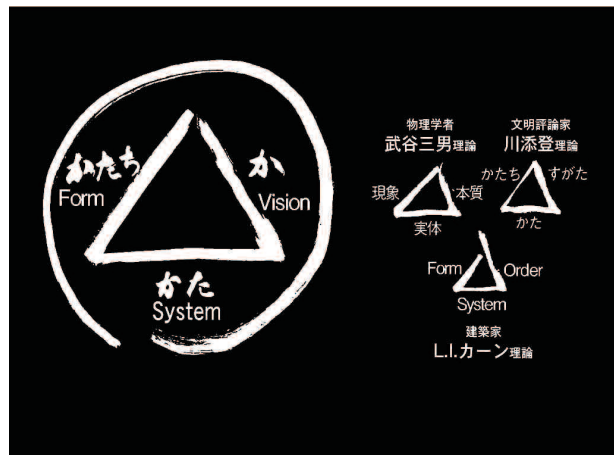
武谷先生は非常に人なつっこい方で、奥さまがドイツ人で、憲兵に付け狙われたり、随分、苦勞をされた方でした。武谷先生の論旨は、中間子を見つけ出す上です、[現象論的段階]があるとされた。これに対して[実体論的段階]がある。それが第二段階です。そして第三段階には[本質論的段階]がある。「現象論的段階」、「実体論的段階」、「本質論的段階」の3つの段階を通して本質を探るとおっしゃいました。でもこれは聞いてもなかなか難しい。特に“実体”については国内でも哲学の関係の方々に、一体なんなんだとつくづく追求されていました。しかし、私はその論を聞いて面白い考え方だなと思いました。何でそんなふうにしたのかよく分かりませんが、武谷先生は3つの段階を設定して、そして本質を見つけ出し、ノーベルプライズを受賞された。中間子の存在を指摘されたのが、受賞内容です。

そこで建築でそれを考えるとどうなるか、また都市で考えたらどうなるか。「建築で方法論を問えば、こういうことではありませんか」と、迷惑も省みずに先生のお宅までおしかけて、直接、武谷先生に問い掛けました。武谷先生は「まあ、そういうことかな」ぐらいの反応でした。それで私はこれに勇気を得て意見を述べ、方法論について書きました。

ところが、日本の哲学者からはあまり深刻に表立って意見を出されないんです。皆さん大人で、学会の中では議論なさいますが、他の分野については我関せずなんです。ですから私は日本では三段階方法論に関して哲学のご専門の方々とは議論しておりません。



■2



■3 菊竹氏、武谷氏、カーン氏、川添氏の三角構造

2-2 方法論の必要性

ところが、10年くらい前になりますが、またドイツのアーヘンでそのことを述べて、初めて議論をしました。ドイツは、哲学において一番だと思います。ドイツの哲学の本が一番先鋭的だからです。アーヘン大学の教授、(マンフレッド・)シュパイデルさんが紹介して下さって、私が方法論の話を始めたら、「それはちょっと古いんじゃないか」と真正面からおっしゃいました。私もびっくりいたしまして、非常に興味津々で、「だったらどなたの理論が面白いんですか」と伺ったら、「うっ」と詰まってしまうと、何もおっしゃらなかったのです。いずれ何か言ってくると思いますが。

更にその議論の後、ハーバード大学で僕の考え方に對して、「もっと違う考え方があるんじゃないか」と言う学生がいましたので、「大変勇気ある発言でした。ぜひ勉強して哲学の分野で学位を取りなさい。アメリカでは建築哲学の分野で資格を得ることのできる大学はハーバード以外にないかもしれない。もっと勉強するにはヨーロッパに行かなくちゃいけないかもしれない」と応えました。その後、反論、あるいは意見は何も来ておりません。

いずれにしても、建築の設計では非常に悠々とやってらっしゃる。そんなことを言っただけは失礼に当たりますが、先輩もそうですし、それから若い人たちも、方法論が必要ない。ある大学の先生で、アメリカで教えておられる方ですが、「方法論というのは各人全部あるんだ。何も殊更、菊竹さんからそんなことを言われなくても、それぞれの方法論があるんだから、それでいいじゃないか」。そういう考え方もあるのかなとも思います。しかし私は、方法論のない人こそ困った時にどう解決したらいいのか、計画の方向も評価の基準も分からなくて迷いが出てくるわけです。これは今、ヨーロッパもアメリカも、それから日本も共通の現象ではないかと思いますが、すでに何をやったらいいかわからないという迷いが出てきているようです。

2-3 方法論の重要性

方法論がいかに重要かということを示す1つの例を上げたいと思います。

建築は程良く“コラージュ”をすると、何となくそれらしいものが出来ます。しかし、“コラージュ”がどれだけ弊害をもたらすか。私はこれを「東京駅」で示したいと思います。なぜなら、明治になって日本の先

生として呼ばれた(ジョサイア・)コンドルが、独自の建築を建てる方法論を持っていないヨーロッパの建築家が、日本に教えに来ていたというひとつの例に、東京駅があると思います。“駅”は全く新しい建築です。“駅”の設計は、鉄道にはなかったものです。世界ではいろんな国で鉄道が引かれて、それぞれの国で新しく鉄道の駅舎が求められたのですが、ヨーロッパの貴族の館のコラージュをやって、いい加減に済ませていました。東京駅の場合も館の合成です。これは駅でも何でもない“館”です。ですから、貴族が互いに集会を^{ほうぼう}方々から館に招待し合っ、馬車を停めたり、皆さんが集まってパーティをする、そういう大変便利なスペースはありました。しかし、“駅というものがどうあるべきか”、“何を目的にしているか”ということは東京駅ではあまり考えられていないと言っていいのではないかと思います。ですから東京駅は絶対に保存すべき価値のあるコラージュ建築の見本です。つまり、先進国だと思っていたヨーロッパが、“東京駅の計画はこうつくったらいいだろう”と行って出来上がったのが、あのレンガ造の館です。

実際に初めて駅の計画を実現できたのは、「ヘルシンキ中央駅」が最初です。フィンランドの(エリエル・)サーリネン、(エーロ・)サーリネンのお父さまが設計されたものが、世界で一番最初の“ステーション”という概念の建築物です。これは正面の大きなアーチをくぐると、1階はいろいろな鉄道の解説や案内があり、そして広場になっています。そこから上の階に上がりますと、何番のコースからどこ行きの列車…という具合に列車がズラッと並んでいて、迷うことは全くありません。列車が入ってきて、列車はここから出発するわけです。私はこれを見て、これなら駅であることが分かるという感じを受けました。それまではこういう駅を設計しないで、館を合成して駅だと言っていた。産業革命後、鉄道の先進国ヨーロッパの建築家たちの多くは英国を始め、こんな“館の合成”を駅として設計していたわけです。一度、合成をやったら、その建築家は想像力がなくなってしまいます。ですから、この建築家はもう、新しい建築をつくる能力がなくなっていることでしょう。

Part-3

石橋正二郎氏との出会い

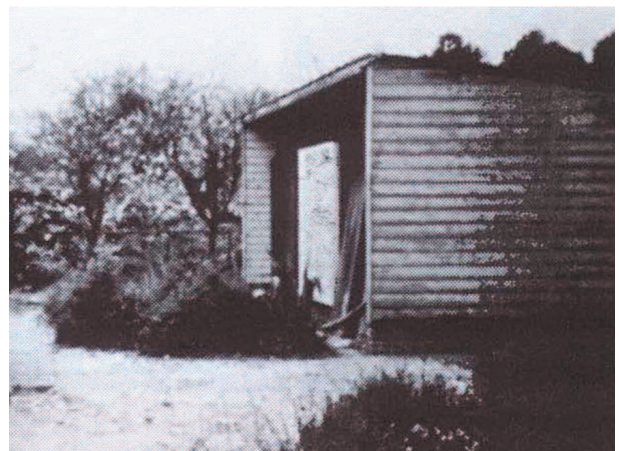
3-1 ブリヂストン

ブリヂストンの本社は、私の郷里、福岡県久留米市にあります。地下足袋を売っている会社の社長・石橋（正二郎）さんがタイヤの新工場をつくるため融資の申し入れがあり、私の祖父に相談に来られたそうです。私の父は当時、今でいう暴走族で“インディアン”というすごいオートバイを乗り回して遊んでいたようです。だから祖父が父に、「こんな相談が来たんだけど、お前は思う？」と相談したんだと思います。父は「次の時代は自動車の時代になりますよ」とさも訳知りのような顔をして答えたのではないかと思います。自分はオートバイに乗っていて、タイヤのことで知っているのはそれぐらいしかなかったでしょう。それで祖父は「そういうことならじゃあ…」と言って、工場をつくるために資金面でいくらかお手伝いをしたらしいのです。それがきっかけで、石橋さんは「菊竹さんが大学を出たから、建築を頼んであげよう」と言われましたので、私は喜んで、ありがたいと思いました。そうしたら「菊竹さんには文化的なものをやっていただきます」とおっしゃるんです。文化的なものって何だろうと思ったら、古い建物の曳き移転でした。工場で古くなった建物を改造して「母子寮」にしたり、永福寺の「(永福寺) 幼稚園」にしたり、全部古い建物の曳き移転という再利用だったのです。

3-2 母子寮

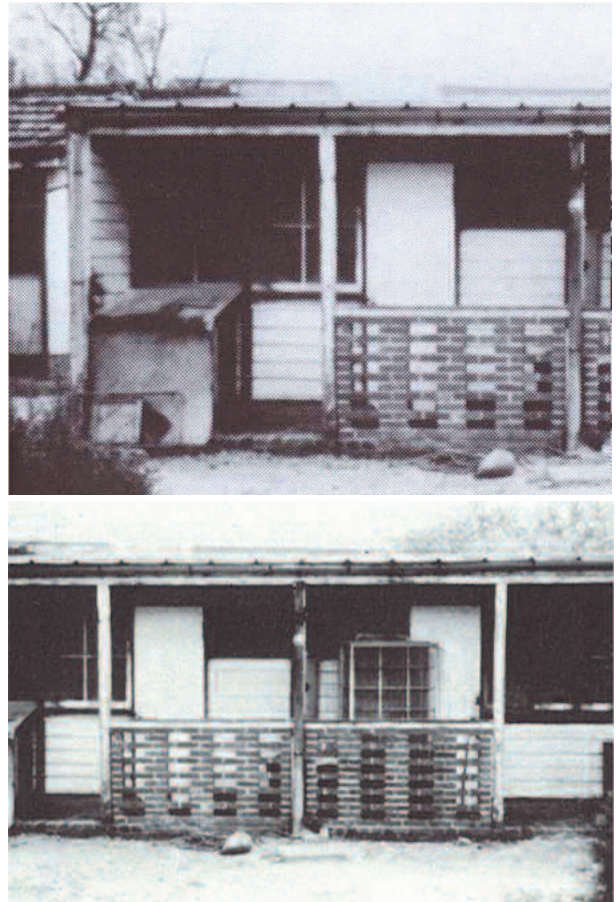
fig.4,5,6

お金についても、工場を経営される方というのは、なかなか図太い。“文化的な”とおっしゃったから何か新しい建築計画の設計とばかり思ったら、全部古い建物でした。ところがやっぱり見る所は見えてらっしゃった。母子寮とは、ご主人が戦地で亡くなって、子どもと奥さましか残っていない、そういう家庭のための長屋でした。大きな長い建物で、6畳くらいの部屋が仕切りも何もない状況で、そこで生活していました。私は憤然として「こんな母子寮は設計できません。私がやるなら、一家族に1つ、一家族に1軒でなきゃダメです」とねばったんです。これが方法論という仮説です。そうしたら「そんなに言うならやってみなさい」と言われた。喜び勇んだのですが、「その代わりお金は始めに決めた金額だよ」とおっしゃる。そうすると長屋は



■4 母子寮 (1957)

安くてかなわない。相当知恵を絞ってもなかなかできない。それでいろいろ工夫を凝らしてつくりました。例えば、母子寮の腰壁の所の古レンガは工場ですべて使っていたレンガを再利用で使っています。その壁の後ろには流しをとりました。

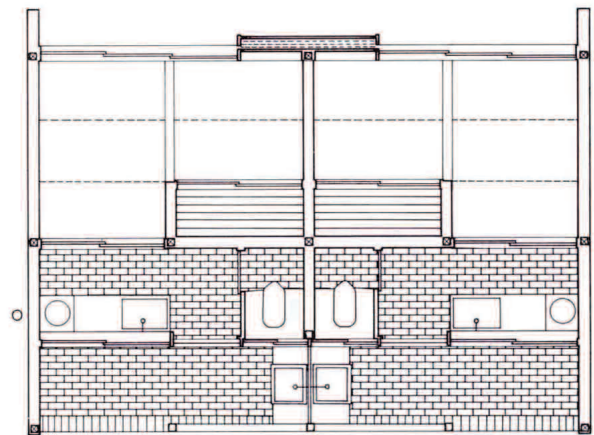


■5,6正面入り口部分 腰壁には古レンガが使用されている

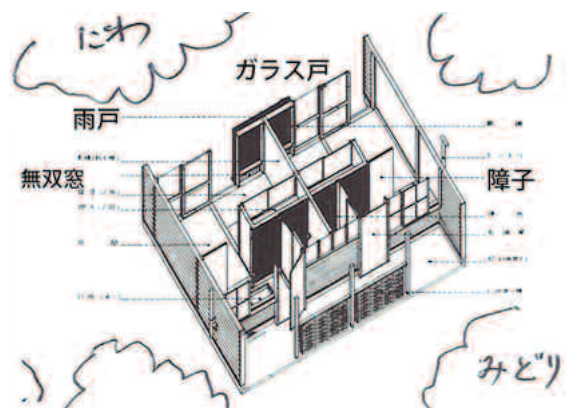
fig.7,8

これは2戸建ての住宅で、2つの家族用です。その代わり、“一家族に1つ、一家族に1軒”などと言った手前、寝る部屋と前の方でちょっと使えるような、子どもがいる家庭には子どもの勉強机を置けるような場所もつくりました。そして流しのある台所をとった。これは全部古材です。建具も既存の建物に使われていたものを使いました。一番苦労したのは建具です。ガラス戸が普通の家と違う。普通は子どもの寝床や親の寝床の布団を敷くと狭いから、へりの一番端まで布団がくるわけです。そこに寝ようとするとき間風が入ってきます。だから、段差を敷居のところまで工夫をして、夜にすき間風が入ってこないようなディテールで設計しました。そんなことをやって、少ない予算を工夫して、こういうものを幾つもつくりました。住宅はそういう小さなことが積重なって、生活のできる建築にしています。ただ、この母子寮に入った方がどのくらいそれを喜んで下さったのかは私は聞いておりません。

母と子の生活にとってどういう建築が良いか、に対する仮説、そしてこれを証明する技術、更に子どもが成長してどう思うか、聞いていないのは残念です。



■7平面図



■8アクソメ図

3-3 永福寺幼稚園

fig.9,10,11

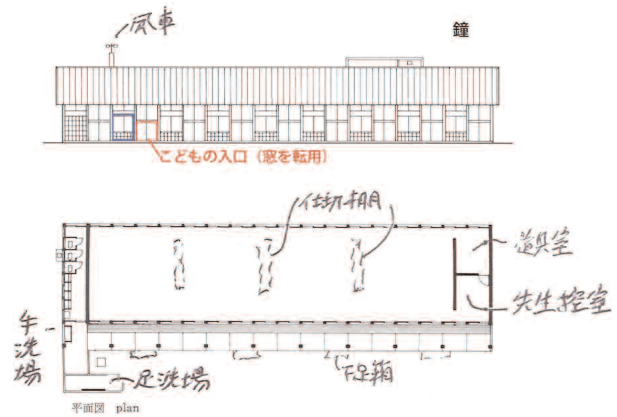
この幼稚園は大きな戸と小さな戸があることで評価されました。この出入り口は大きい方は古い建物で使われていた引き戸。小さい方は普通の窓で、これを子どもの出入り口にしました。



■9 永福寺幼稚園 (1956) 正面外観



■10 内観



■11 平面図・立面図

fig.12

この幼稚園は曳き移転する前は工場にあった建物で、その建物を幼稚園に変えました。私がメタボリズムで「解体・組み立て」について本格的にやる決心をしたのは、この幼稚園がきっかけです。実際に竣工式のあいさつで、市議員だとかいろいろな方が後ろの方で「石橋さんみたいな金持ちが、なんでこんな古いものを幼稚園にしたんだ。新しいものでつくってあげればいいのに…」なんて声を聞きながら、本当に情けない仕事だな、古い建物で申し訳ないと思っていたら、その幼稚園の子どもさんが出てきて答辞を述べられた。「ブリヂストンのおじさん達が戦争時代に守って下さった柱を、自分たちの柱にして、これから大切にしていきます」と喜んで下さった。これは古い建物を再利用することは決してまずいことではなく、本当に精神的に大きな役割を持っている。これは本格的にやるべきことだと決心いたしました。

この幼稚園がきっかけで、私は本格的にたくさんの仕事をやりました。石橋さんに「古い建物で設計を…」と言われても、「また古い建物ですか」と言わなくなり、喜んでやるようになりました。本当にそういう意味で、石橋さんにはお礼を申し上げたい。どんな建物でも、時がたてば、みんな古くなる。そこで新しい価値をつくり出すことは、すべての建築にとって重要な課題だ



■12 外観

と気付かせていただいたからです。

更に石橋さんは、久留米市にある自分のお墓やお寺も古いレンガでおつくりになった。石橋さんがお亡くなりになって、そのお寺でお葬式がありました。その椅子なども自分の考えでおつくりになったもので、非常に質素で簡素なものです。私は、石橋さんの物を大切に考える考え、それから有効にこれらを利用していくという考え方、そしてそれを何か面白い建物にして、多くの人々の生活に役立てていくことをずっと考えておられたのではないかなと思って、非常に立派だと思いましたし、今は本当に感謝しております。それがメタボリズムのきっかけにもなったわけです。

3-4 ブリヂストン殿ヶ谷第一アパート

fig.13,14

これは厚生省の補助金で「(ブリヂストン殿ヶ谷第一)アパート」を、横浜工場のすぐそばの殿ヶ谷に設計しました。その時に、私に石橋さんが「今度は新築だよ」とおっしゃった(笑)。しかし本当に、これをどうつくるかは、ものすごく悩みました。この頃に出来たアパートはみんな公団のアパートのような感じだったので。ですから本当にこれが、これからの日本の優れた建築になり得るかどうかを試されていると私は考えました。日本の生活をアパートでも実現できないかが仮説でした。そこで室内のサッシュ割りは障子割りとし、障子割りというと非常に体裁が良いのですが、実は一番安いガラスで、一番簡単な方法でサッシュを組み立てて入れています。

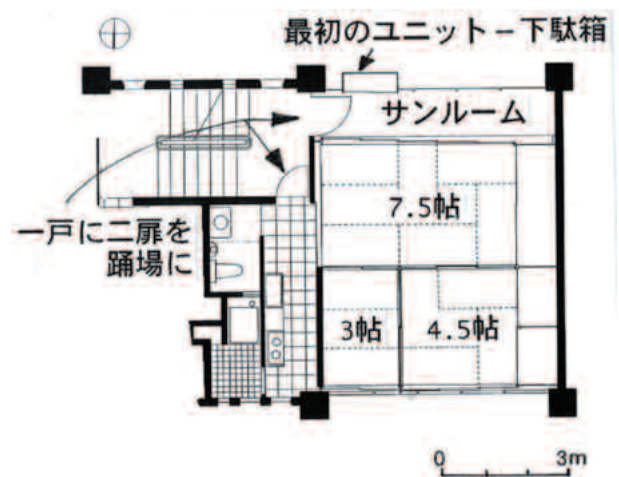
ここでは広さをご覧いただきたいんです。7.5畳なんて公団のアパートにはない。では、なぜ6畳をとらなかったか。6畳だったら使い方が分かっているのに、7.5畳なんて妙な部屋をつくっても、本当に使いにくくて困るんじゃないか。他には4.5畳と3畳、大中小と、家族を想定して、生活に対応できるものをつくりました。

ある時、荏原製作所の会長・畠山(一清)さんの軽井沢の別荘に伺った時、7.5畳の部屋があったんです。その部屋の奥の方に座っていると、いろんな人がキッチンから入ってくるんです。それを見ながら「どうしてこの7.5畳をおつくりになったのか」と伺いましたら、つまり生活の仕方によって、この7.5畳が生きてくるのが分かりました。ここに6畳の部屋をとったら公団のアパートになる。

また、南側にサンルームをとって、そして7.5畳の居



■13 ブリヂストン殿ヶ谷第一アパート (1956) 南面断面図



■14 平面図

間のプランにしたのです。玄関はサンルームを正規の出入り口とし、台所にもう一つキッチンドアをとる。こんなキッチンドアなんていないんじゃないかと言われましたが、御用聞きなどが来て、いろいろな物を運び込むのに、キッチンドアは大事です。そして他に洗面所と台所とお風呂をとりました。

ここには面白い点が2点あります。1つは、サンルームをとったということ。サンルームまでを部屋にすれば8畳の部屋がとれるのに、なんでサンルームなのか…。これは、実はサンルームが7.5畳の部屋の延長のようなかたちで使える。更に物干しなんかもサンルームでできます。それにここはガラスで全部オープンですから、さんさんと光が入る。

ただ、この玄関に下駄箱がない。玄関からサンルームに入って、靴をどこで脱いでどこに置いたらいいか困り果てて、サンルームに下駄箱を出窓のようにしました。これが「ムーブネット」の始まりです。そこに長靴から何から下足の処理が綺麗にできる。そしてこれは後々やめてもいいし、冷房を入れるならユニットクーラーを設置してもいいというように、どんなふうにも使えることにしました。最初にこういう問題をきちんと解決し、証明したのが始まりです。ただ、7.5畳の部屋をとったことを、このアパートに暮らす人が本当に喜んで下さったかどうか分かりません。

それから第2点は、トイレにシャフトがあります。皆さんはあまりお感じにならないかもしれませんが、アパートは天井高が低くて、お手洗いに入ると、上の階のお手洗いがスラブにくっついているために、上の階でバツと流すとジャーツという音が伝わってくる。これが嫌でたまらない。何とか解決できないかとシャフトを少し大きめにして、直接スラブに付かないようなかたちで解決しようと思いました。そういう実態を見るために、日本のいろんなアパートを私は見学しました。だけど、上の階でトイレを使用している下でも平気なんですね。嫌なはずだと思うのですが、嫌じゃないらしい。ですから日本の方々、特にアパート生活をなさっている若い方々は、非常に耐え難きを耐えておられる。本来は互い違いに付けるとか、何とかしたいと考えました。

中でどう生活するかというのは非常に大きな問題点です。アパートの住宅は小さいけれど解決していかなくてはいけないことが多いと感じました。仮説を立て、これを具体的に解決して明日への希望をつくり出すこ

とが、方法論から見た設計の問題でした。

3-5 コストについて

コストの問題です。これは石橋さんがお亡くなりになった今は時効だと思って、聞かなかったことにしていただきたいんですが、建物をつくるのに厚生年金から補助金が8割出るんです。その頃、坪当たり5万円かそれぐらいだと思いますが、その8割が出るわけです。石橋さんは「コストは補助金が出る範囲内でやってくれ」とおっしゃる。それで他の建物よりもコストのことをきちんと考えた設計をしなくてはいけない。その難題に応えるため相当、苦しみました。設計者にとって、コストで縛られるのはどれだけ苦勞するか。オーナーというのは倍ぐらい出してもいいから、「良いものをつくってくれよ」と言うのかと思ったら、そうじゃないんですね。本当に鍛えられました。ですからコストについて、私は設計をする時にすぐ考えます。ザッと大体の概算をしてみる習慣がついたわけです。

3-6 スカイハウス

fig.15

理解者でもある石橋さんから仕事をもらうことはありがたいんですが、このままだったら私は潰される、そういうことをやればやるほど、このままではいけないと思い、「スカイハウス」をつくらうと考えました。石橋さんはスカイハウスが出来た時においでになって、こんな建物で本当に大丈夫かとびっくりされました。私にとって自分の方法論によってつくることは、大変な社会への抵抗でした。今までやってきた苦勞は、スカイハウスに比べたら少しも苦勞ではありません。本来、海外のいわゆるカントリーハウスのオーナーや貴族の人たちというのは、もうちょっと建築家を優遇しておられると思います。だけど日本の建築家は、特に敗戦になってからの経済状況の中を乗り越えなくてはいけなかった。だからこそ、私はまず、スカイハウスをやりました。

Hypotheses 設計仮説

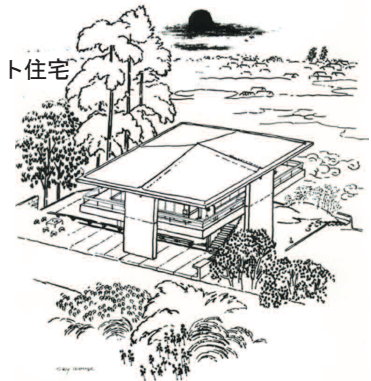
ライフスタイルの拡張

1958 Sky house

1965 樹状住居

1969 ペルーローコスト住宅

自由な生活の実現

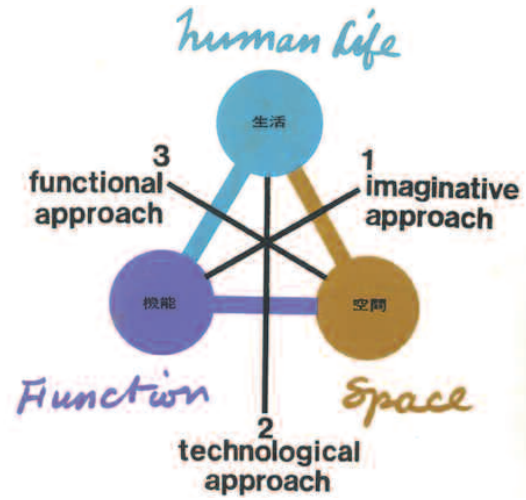


■15 スカイハウス (1958) 設計仮説

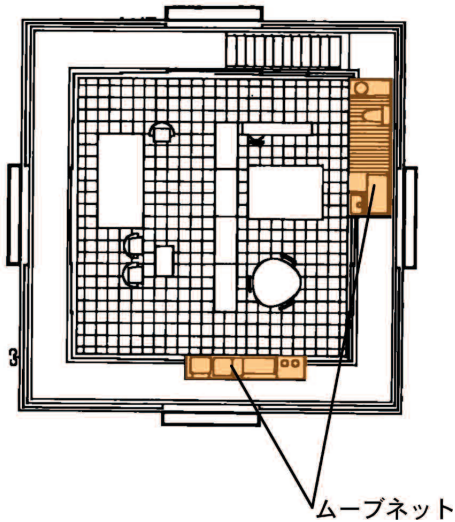
fig.16,17,18

下に1つ子供部屋をぶら下げて、設計に子供部屋を付け加えています。子どもというのは、こと住宅に関しては、成長して、独立していなくなる人です。ですから、いなくなったら撤去して外すことのできるような部屋で十分じゃないかと考えた。そうは言っても大切な次の時代を担う人たちの空間ですから、もうちょっと大切にしないかと思わなかったんじゃないかとも思うのですが。どちらかと言うと私は、子どもには非常に冷淡でした。事実、仕事をやっている最中に、うるさいと何べん言ったか分からない。悪いことをしたと今は反省しています。

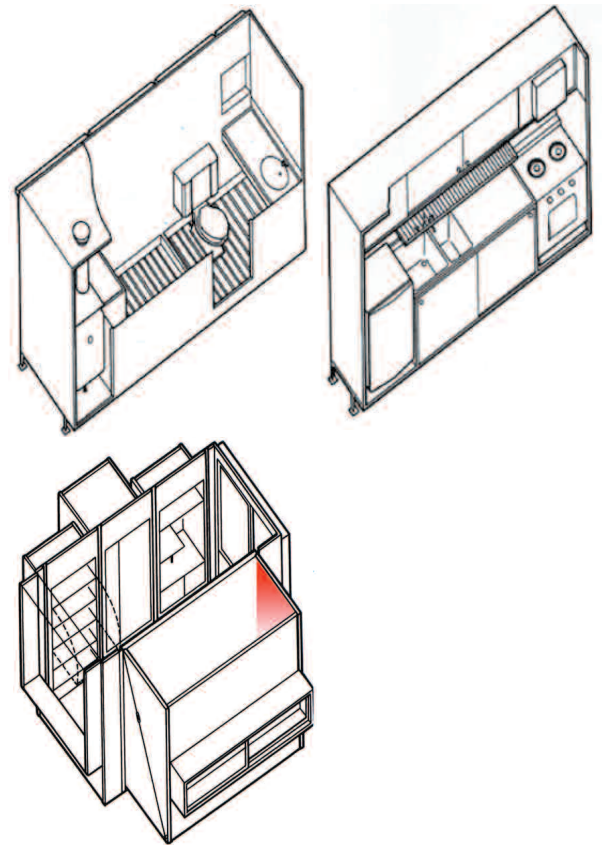
そんなことで、世界中の建築家が東京に来ると、「スカイハウスを見せてくれ」と家を訪ねて来られました。その時に、とにかくいかにして苦勞の多い建築をあえてやったか、実験住宅というものはいかにこういうものだと、いまだに言っております。「ムーブネット」という、移動したり、取り替えたりできる部分を装置として、生活空間は、その中心に人間がいるというコンセプトを貫こうと考えました。住宅での取り替えシステムの始まりです。



■16 設計の三段階構造



■17 平面図



■18 ムーブネット 左上から時計回りに子供部屋、キッチン、洗面浴室

Part-4

世界デザイン会議

4-1 世界デザイン会議

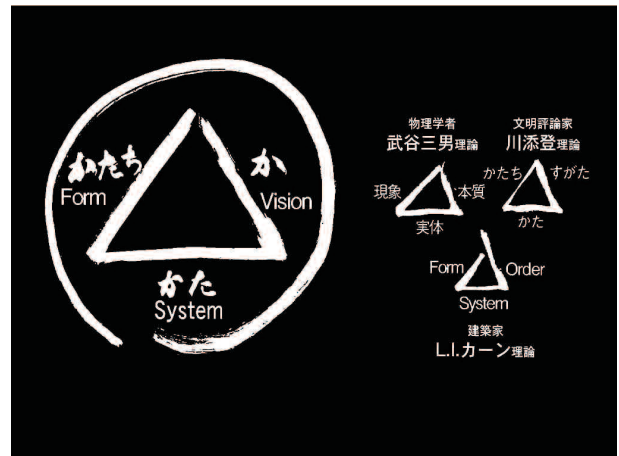
fig.19,20

1960年に東京で世界デザイン会議が開かれました。これは素晴らしいことです。東京でデザイン会議を開くというのは、やはり、われわれの先輩の前川（國男）先生、坂倉（準三）先生、丹下（健三）先生、そういう先輩各位が、将来に対しての見通しをものすごく強く持っておられたことの証だと思えます。なぜかといいますと、東京のデザイン会議のような会議は、世界中でその後、一度も開かれていないようです。あそこに一流のグラフィックデザイナーやインダストリアルデザイナー、あるいはその他、インテリアデザイナー、建築家、都市計画家、評論家も含め、そういう各国の方々が一堂に会して議論をするような会議が、よく開かれたと思います。私は日本には本当に素晴らしい先輩がいらっしやんなあと、つくづく感心しております。ここにいらっしやる皆さんが、ヨーロッパの手遅れな状態、停滞している建築の状況を一緒になって議論し、当時よりもっと楽に、大変良い機会がつかれると思うんですが、それができない。そして、建築の分野でも都市計画の分野でも、それから建築のいろいろな産業、今日はコンサルの方だとか土木関係の方、建設関係の方など、^{ほうぼう}方々で仕事をなさっている方が多いと思いますが、そういう方々も行き詰まっている。こんなに停滞が起きているのはなぜかという、建築の分野で方法論がないから起きているのではないかと思います。これを突破しなくちゃいけない。それはまた後で、いろいろと議論が出ると思いますが、方法論は必要です。未来のビジョンが必要だと、“かの段階”の問題を一緒に考えていきたいと思えます。

4-2 ルイス・カーンとの出会い

fig.21

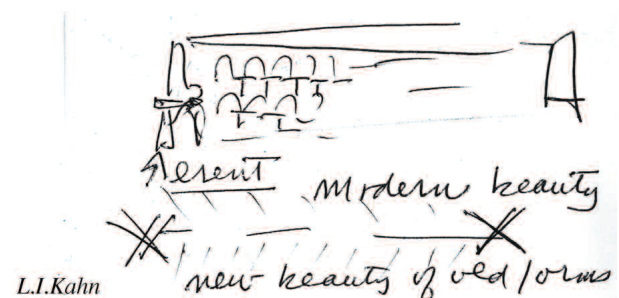
驚いたのは、そのデザイン会議でルイス・カーン先生とお会いしたことです。私はルイス・カーンを知らなかったんです。どこの誰かと思っていた。しかし、川添登先生が、「ルイス・カーンさんは面白いよ」と言うんです。川添先生は大学で文系と理工系と両方出て、日本の代表的な文明評論をおやりになった方です。ちょうど、スカイハウスが完成したばかりで、見せてくれるのでお見せすることになりました。そうしたら



■19 菊竹氏、武谷氏、カーン氏、川添氏の三角構造



■20 『メタボリズム1960』 世界デザイン会議に際して出版された



■21 ルイス・カーンによる「出雲大社庁舎」についてのメモ

見るだけじゃなく、ルイ・カーン先生が方法論で議論をふっかけてこられるわけです。ルイ・カーン先生は自分で考え、方法論を確立されている。一方、こちらは原子物理学者が考えた中間子理論を背景にしていますから、負けるものかと思っいろいろと議論を返したら、なかなかさる者なんですね。やはりルイ・カーン先生も随分、面白い意見をおっしゃっていた。ただし、英語です。しかも後で分かったことですが、ルイ・カーン先生の英語は大学の授業でも、とても難しい講義だったそうで、よく分からないんです。この時ちょうど、榎（文彦）先生がハーバード大学から帰って来られた時で、通訳をかって出て下さり、ルイ・カーン先生の難しい英語を訳して下さいました。通訳の方で大変なんですよ。一方がしゃべっている間に訳して伝える。今度はカーン先生の方の通訳をしなくちゃいけませんから、何も考える暇がないぐらい厄介で、とうとう口に腫れ物が出来てしまったらしく、榎先生にはご苦勞をおかけしました。ルイ・カーン先生は、非常によく私どもにもお話をして下さいました。そして私はルイ・カーン先生の議論の中で、盲点が幾つもあることに気づき、それを指摘しました。例えば学校は、教室という“マスタースペース”と、廊下という“サーバントスペース”で成り立っているという仮説をお出しになり、国際会議でも、この講演をされました。しかし私には逆転して、廊下こそネットワークとして重要で、教室をサポートしていると述べました。この議論は一度では済まず、ルイ・カーン先生は帰りに、「自分の方法論についてペンシルバニア大学で教えているが、1人もそういう質問をしてきた人がいない。日本に来て初めて聞かされました」とおっしゃっていました。それから無二の先輩です。とにかく大先生は非常に親しく、いろんな話をして下さるようになりました。私がフィラデルフィアに行っている時に、ちょうど日本から香山（壽夫）先生がペンシルバニア大学で勉強をされていました。ルイ・カーン先生が授業中に急にいなくなりました。どうしたのかと思ったら、「菊竹さんが来たのでそっちの方に…」と言って、学生をそっちのけで私の相手をして下さいました。アメリカに行った時は、いつも時間を取って議論をいたしました。「今何を考えているのか」、「こういうことを考えている」、「それをどう思うか」と。それからまた私に対して「どういうことを考えているか」と言って議論がずっと続いていきました。そんな感じでした

ので、ルイ・カーン先生の亡くなり方は本当に残念です。インド出張の帰りに、ニューヨークの駅のトイレで心臓発作で倒れ、お亡くなりになりました。名前も分からなくて、身元不明で駅の行方不明者を入れておく冷蔵庫に保存されていたということです。本当にかわいそうだったと思います。

ルイ・カーン先生は方法論の分かる方だったので、私は誰にも増して身近にいろいろなことを議論させていただきました。今、方法論を議論できる方は、スイスにおられます。私と同じぐらいの年齢の方です。ヨーロッパにも哲学をやっている人が少ない。これは大問題です。行き詰まりが出た時にどうするか。最初に建築を考える時、仮説を立てないでいきなり設計をなさっています。けれども、私は「本当にそれでいいんですか」と聞き、方法論の問題を持ち出します。

東京帝国大学を出られて法政大学に教えに行かれた大江（宏）先生は唯一、大学で建築哲学をやっておられました。しかしそれ以外は、どなたからも聞いたことがない。哲学の講義をなぜ大学の建築でやらないのか。哲学の講義をやらない大学には未来がない、“か”がないと思います。

Part-5 プロジェクト

5-1 塔状都市

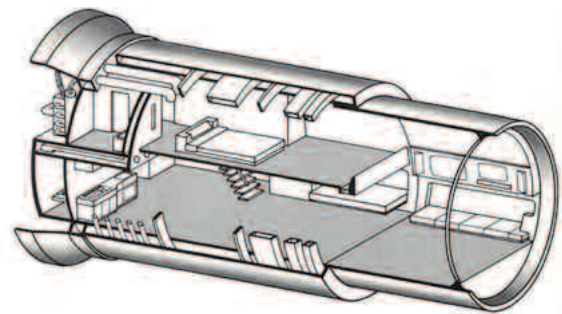
fig.22,23,24

スカイハウスを建てた後、都市の問題について考えました。すると、どうも都市住宅は、東京の場合、非常に圧迫されている。だからもっと自由に住宅をつくるべきではないか。しかも自由につくると同時に、都心につくるべきだと考え、そのためにはどうしたらいいかというので、私の家の近くの池袋を中心にして「塔状都市」というプロジェクトを考えました。やってみたら驚きました。超過密です。池袋に住んでいる人を入れて、それにプラスアルファの人が住むためには、高さ300m。当時の建築基準法は30m。それに住宅は壁面に付けて、とにかく無駄なことをやっては申し訳ないので、昼間は広く使い、夜になったら空間をグッと縮めて寝る部屋だけにする。そういう伸縮できる住宅を考えました。そして、エコロジカルな環境を住宅で実現しようと思いました。ですが、こんなに林立するとは考えていなかったし、当然、建築基準法に違反して建築をつくらうとは考えていなかった。皆さんからは「菊竹はバカだ」、「実現できないようなものを何のために提案するんだ」、「全く空想だ」と随分からかわれました。テレビでも引っ張り出されて、アナウンサーが「まだ実現しないんですか」と言う。それを言われるたびに非常に不愉快で…。でも私は敢然として、「これは都市計画が問題なのだから、まず、都市計画法を変えなきゃいけない」と言っておりました。

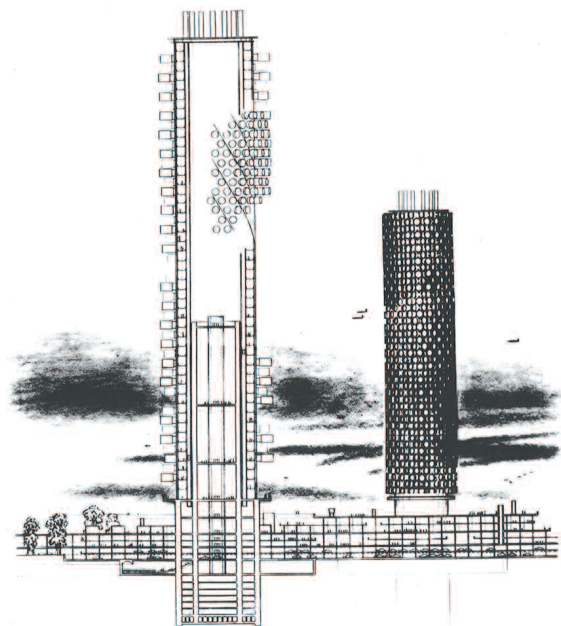
ところが、竹山（謙三郎）先生（当時の建築研究所 所長）が、「菊竹さん、そんなに嘆き悲しむことはない。いずれ、建築基準法は変えられますよ。高さは十分必要だけ建てられるようになります。第一、一番重要なことは、日本のように地震が多く地盤の悪い所には、大きな基礎を1つきちんとつくって、その上に高い建物をつくるのが合理的だと私は思います」とおっしゃった。竹山先生は立派な方でした。研究所の所長が、そんなことを言って大丈夫かなと私は心配したんですが「いや、私はそう思っています」とおっしゃった。竹山先生は気骨がありました。気骨があったのか、同情して下さったのか。とにかく励まして下さった。それで私はそれから後も性懲りもなく、「高さに関してはもっと基準法を改正すべきだ」と言ってきたんです。今はそうになりましたね。法律は社会条件によって変わるも



■22 塔状都市（1958～）



■23 核家族を想定した住戸ユニット



■24 住戸はムーブネットとして取り付けられる

のでした。

5-2 海上都市

fig.25,26,27

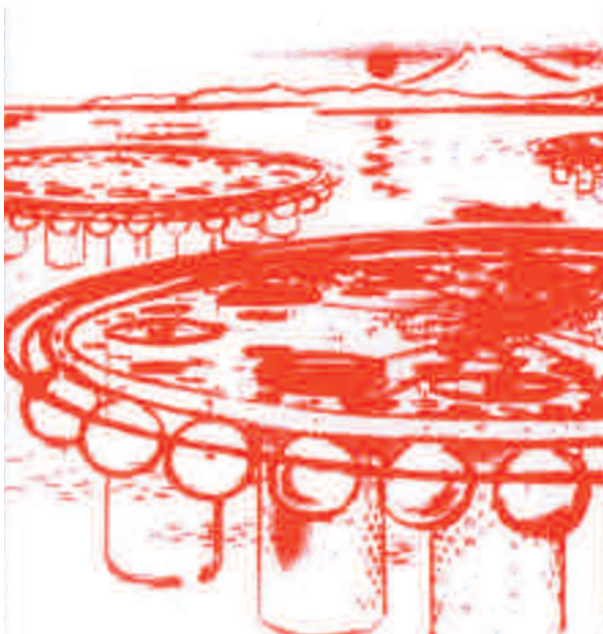
私はブリヂストンの横浜工場の計画で、海岸線を通ったのですが、海岸にはいろんな工場が出来て、しきりに埋め立てをやっていた。ちょうどその頃、ブリヂストンで新しい工場を計画しておられた。そういう所に工場をつくるのは大いに結構ですが、私は建築家として、海岸線を閉鎖するような形のコンビナートという埋め立ての方法はどこか間違っている、コンビナートはむしろ沖合いにつくるべきだと考え、「海上都市」の提案をつくりました。しかし、そんなことには誰も共鳴してくれない。第一、そんなことをやろうと言った途端に、当時、漁業組合が大漁旗を立てて北海道から九州まで集まってきて、「自分たちの権利をどうするんだ、江戸時代から続いている漁業権をどう考えているんだ」と言って、反対運動を起すんです。これは日本で海上都市というのは絶望的だと思いました。そんなことを考えて半分悲観的になっていたら、アメリカ建国200年の記念に“海上都市”を考えたいと私をアメリカに呼んでくれました。そのため、ハワイ大学に教えに行きました。そしてハワイ大学で、アメリカ建国200年記念の海上都市計画をやることになりました。

建築家というのは、いかに建築の考え方、生活のこと、それからそれに関連することは何でも、建築家の仕事として考えていかななくてはいけない立場であることを痛感いたしました。この時のアメリカ海軍の研究成果が私を勇気づけ、新技術が海上都市の実現に重要であることを知りました。1971年のことです。

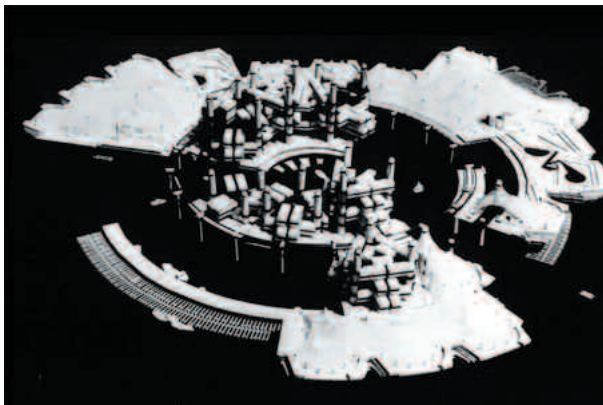
Hypotheses 設計仮説

- ・ 第二の自然の創出
海上都市 塔状都市 人工土地

■25



■26 海上都市 (1958)



■27 ハワイ海上都市 (1971) アメリカ建国200年記念万博で発表された計画案。最大直径は7.2kmある

fig.28~32

5-3 京都国際会議場設計競技

メタボリックな建築を考えるには、幾つもの設計仮説が必要です。例えば、「京都国際会議場のコンペ」をやる時には、2番目の“同一機能を同一レベル”について考えました。

京都国際会議場には、デリゲーター（代表团）の方々、プレス関係の方々、傍聴の方々、そして事務局など、ものすごく多くの人数が集まってくるために、会議場の機能が多様に分かれていて混乱する。京都国際会議場は、そういう方々が一堂に会して議論をする建物です。

ところで、国際会議がなぜ行き詰まり、議論が延々と続くのか。そのひとつは設計が悪いと私は考えます。世界中の国際会議場の設計が悪いのです。私は、ル・コルビュジエが基本設計したニューヨークの「国連の国際会議場（国連本部）」、それからその他の国際会議場をずっと見て歩きました。何が問題かという、国際会議を開く時に、デリゲーターが「どこで議論をするか」、「どういうことが問題なのか」を誰も重視して考えてこなかった。国際会議場と会議室だけつくればそれでいいと思っている。デリゲーター同士で下打ち合わせをしたり、「今度はこんなことが問題だぞ」、「そうしたら君は賛成してくれよ」とか、そういうネゴシエーションの場所がひとつもない会議場を設計している。そんなことでは国際会議がうまくいくわけがない。例えば、国連の国際会議場をご覧になったらすぐに分かると思いますが、会議室は大会議室、中会議室とあります。だけど、代表团が隅っこの方でちょこちょこ打ち合わせをする会議の骨子になるような議論のスペースや、同意を求めるようなコーナー、そしてまた、反対は反対だと議論ができる場がとられていない。この私の案では、そういう国際会議場の大、中、小さいもがありますが、代表团同士が集まる所、ちょっと2、3人集まって下打ち合わせする所などをたくさんとって、これを全部見えるようにした。プレスが会議場に行って取材しようなんていうのはダメです。能力のないプレスマンは、会議場に行って最後の宣言やペーパーをもらって、それを記事にしようとする。だけど本当のプレスマンは、それぞれデリゲーターに「今度はどんな質問をするんですか」、「どこが反対なんですか」、「どこことこの国が合意しているんですか」、「どういことを議論しているんですか」ということを聞

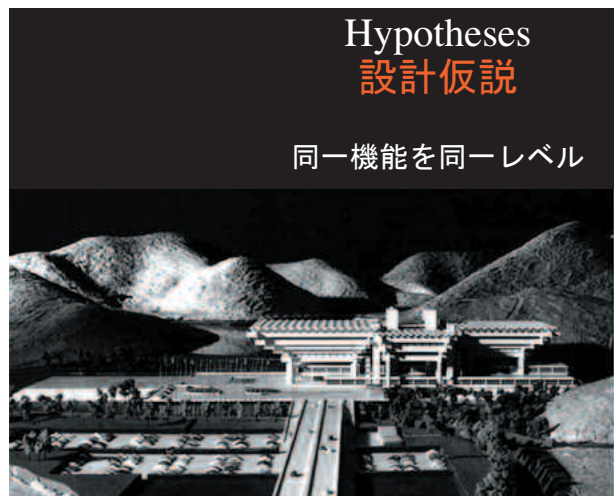
設計仮説

1. とりかえで更新—metabolism
2. 同一機能を同一レベル
3. 光・音・空気を統一
4. 多触手空間
5. 自然との調和
6. ライフスタイルの拡張
7. 建築・都市のネットワーク化

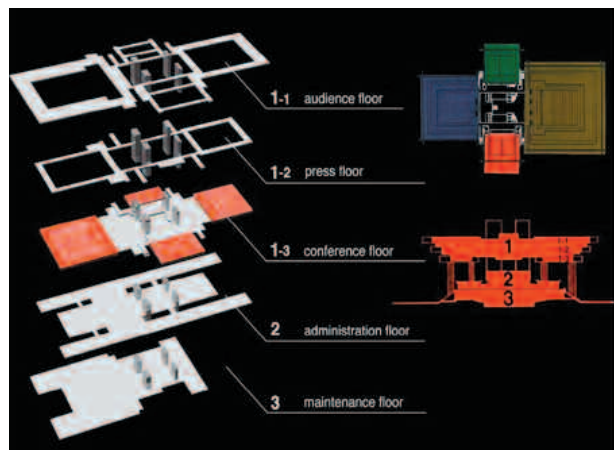
更新

メタボリズム
metabolism

■28



■29 京都国際会議場設計競技（1963）

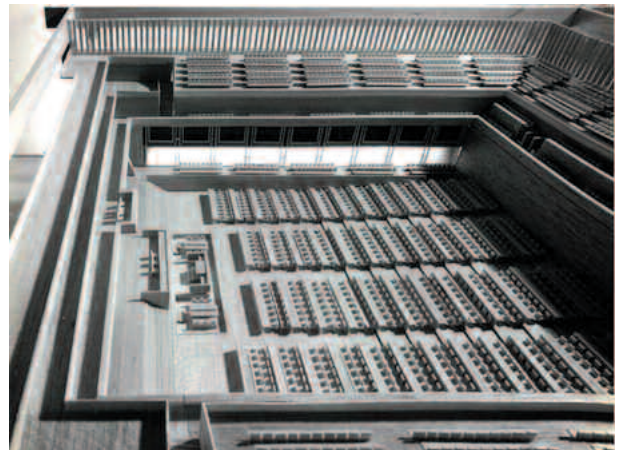


■30 代表階、事務局階、プレス階、傍聴階に分けて計画

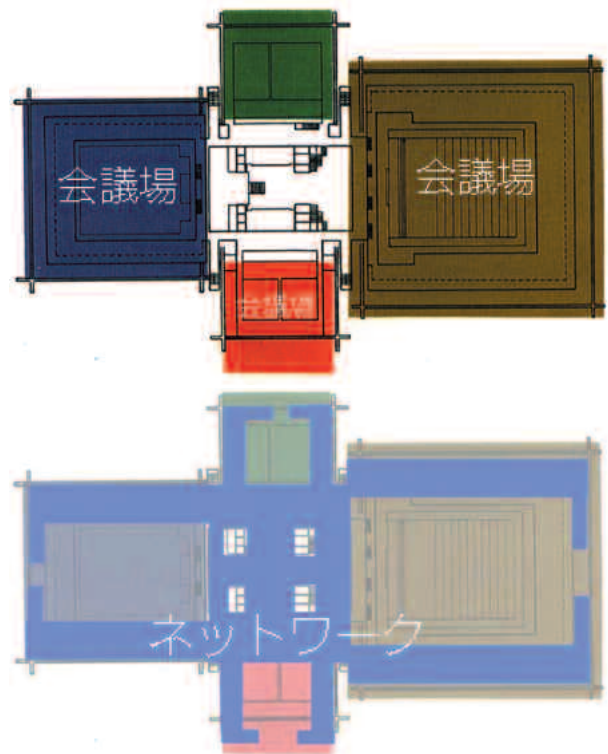
きたがるものです。その国際会議場の中で「どこどこがヒソヒソ話をしている」、あるいは「どうもこういうことを話しているらしい」、ということを取材できなかつたら、本当の取材をしたことにはならない。ですから、私はヨーロッパにあるいろいろな国際会議場を見て歩いた結果、京都国際会議場では、プレス階だけを横にザーッと移動すれば、どの会議場も全部、それからまた会議場の前の打ち合わせをする広場とか廊下の隅の方などを全部、見えるように計画しました。だから上広がり、下を見たら各階が全部見える国際会議場になったわけです。形が面白いからそうやったんじゃない。しかし、この計画を見て審査員の有名な建築家の方が、「菊竹君の案はあまりに閉鎖的で、あれはちょっと暗いんじゃないか」とおっしゃった。ですから私はご本人に直接「それは間違ってます。この案をよく見て下さい。よくご覧になれば分かります」と反論いたしました。天井からは全部光が透過して、中に入るようになって非常に明るいのです。会議場のどこを見ても、ちゃんと代表団の顔、プレス、傍聴席すべてが分かる、そういう会議場にしました。しかもそこから同じ高さで外を見ると、緑が非常に良く見える。窓がないなんて審査員は何を見ていたのか。私の案は他のコンペの案と比べて一番明るい、景色の良い、開放的な案だったのです。ですから私は、こういう審査員で審査をしたのではあてにならないと思いました。それは日本の代表的な建築家でした。何でこんなふうにホッパー型になっているかということも、ご理解いただいていた。方法論として、形からその意味、技術を推測されていなかったのは残念です。そして更に、将来の国際会議にとってどんな会議場が必要となるかのビジョン（か）が、審査で見られなかったことは問題ではなかったかと思えます。

fig.33

国際会議場の案は非常に大きな構造物でした。この構造物は下から見ると大変な構造物です。この構造は特別な構造で、プレストレスでした。ですからプレストレスを建築にこれだけ大量に使うことは、私の「出雲大社（庁の舎）」の計画でちゃんと実践して、こういう案の実現可能性を提案したわけです。これは光弾性理論でいろいろと実験済みのものを使っていました。ですから国際会議場コンペの審査員は新しい構造のこともほとんどご存知なかった。建築家は構造は構造の



■31 京都国際会議場設計競技案模型



■32 空間かネットワークか



■33 松井源吾先生による光弾性実験

人がやればよいと思っておられる。しかし、実はそうじゃないことが、三段階の方法論で示しています。

5-4 出雲大社庁の舎

fig.34

出雲大社は約35、6mのスパンでした。これらの部品を全部プレストレスで固定しているわけです。プレストレスの構造物をどなたも真剣に考えようとなさらない。一番重要なことが構造技術の“かた”です。これをどういう方法論で考えたのか、構造をちゃんと分かっている方でない、なぜこうなっているのか架構の面白さが分かってもらえない。

このジャッキで閉めている写真も、とても面白いはずです。プレストレス構造はフランスから始まって、フランスでこれをどういうふうに締めているか。現在のコンクリートの構造物はこのプレストレスを使って、非常にクラックが入りにくい、そういう構造にしています。新しい構造を日本の建築家はもっと理解していただきたいと思います。

fig.35,36

部品は全部、別な所でつくって、そして現場で組み立てる。「解体・組み立て」はこういうところから出来てきている仮説です。しかしここで、「解体・組み立て」の話を上上げるつもりでしたが、コンクリートでやる前に何を考えたかについてお話することにします。

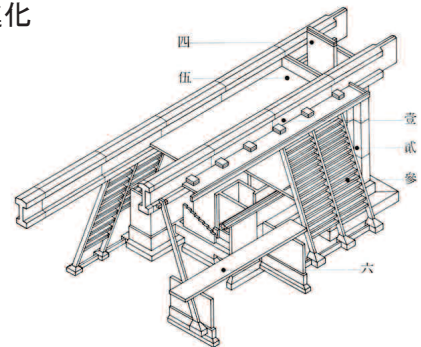
近代建築の材料である“ガラスと鉄とコンクリート”をひとつずつチェックしました。まず最初に柱から梁から全部ガラスでやったらどうなるか。私はサンゴバンドとかコーニング、ピルキントン、そういう世界のガラスの三大メーカーの会社に行って、全部点検しました。そして結局、その頃はプレストレスの材料や、特別につくった強化ガラスは、イニシャルストレスが入って途中で爆裂するということでした。「応力が解放されていないガラスはやっぱり使えない」と言うので、大変残念でしたが、ガラス案を放棄しました。日本は雨が多いので、ガラスでつくられた建物は雨が降ると、綺麗になるというので、ぜひガラスでやりたいと思ったんですができなかった。それで次は「鉄でやろう」と、全部キャストアイアンでやることを考えました。キャストアイアンも、ものすごく面白い。問題は多々ありますが、まず第一に新日鉄がタジタジになってやらない。今であれば「鉄で全部、鉄板やキャストアイ



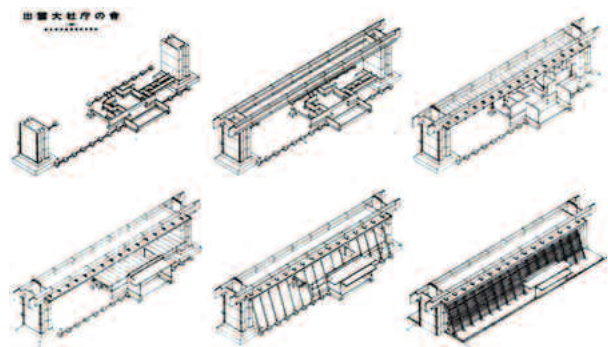
■34 出雲大社庁の舎 (1963)

Hypotheses 設計仮説

とりかえで進化



■35



■36

アンでやる」と言ったら喜んでやってくれると思いますが、その当時は「建築を全部鉄でつくるなんてばかげている」と言ってやれなかった。大変残念です。近代建築の材料としてコンクリートが最後に残った。結局コンクリートで実現を考えました。まるで木造のようにコンクリート部材を組み立てて、全体を構成することにしました。こうすれば老朽化してきた時に建て替えができます。

5-5 カトリック教会平和記念聖堂コンペ

fig.37,38

広島のコペは、広島原爆の後の教会のコペです。あまり皆さんをご存知ないかもしれませんが、その話をしたいと思います。私はその頃学生でした。大学では学校にろくに出不い学生が勝手に、先生方がお出しになるコペに出したわけです。その時の案は、とにかく教会の前に広場をとったのです。なぜ教会の前に広場をとるのかというと、皆さんは冠婚葬祭などで来られたら、最後に広場に集まって記念写真を撮るという感じになりますので、広場のない教会なんておかしいんじゃないかと思いました。だから広場をどうとるか。広場というのは光がさんさんと当たらなくてはいけないし、ピシッと立つ教会の壁を背景にして、皆さんが記念写真を撮る。そういう広場をとるべきだと考えた。ところが他のコペ案を見て驚いた。広場が全部ない。敷地のど真ん中に建築だけがある。建築の展覧会じゃないんです。つまり人間社会が教会を中心にして、どういう集まりをし、そこでお祈りをするか、どう使うかという、方法論でいえば最初の現象論的“かたち”をまず考えなくちゃいけないのに、私はそれを見てびっくりしました。他の方のお考えになったのは“建築の”コペだったんです。教会ではなかった。だから広場を取った案は1つもありませんでした。社会生活の中で教会というのはどういう役割を果たすかということを全然考えないコペなんか出せるわけがないのにと感じました。方法論の貧困です。



■37 世界平和記念聖堂コペ案



■38 同上

5-6 都城市民会館

fig.39

これから少し設計仮説のことをご説明したいと思います。「都城（市民会館）」の問題は、設計事務所にとっては大変不幸な事件でした。基本設計をやって、実施の途中から市に「自分たちで監理をやる。事務所でやる必要はない」と言われました。なんだか子どもを連れ去られたような、そんな感じになりました。都城市の市長は大変人格の高潔な、信望ある方だったのですが、都城の設計を選挙の道具にされて、蒲生（昌作）市長さんが退陣されることになりました。こういう事件が起こり、なおかつ“いろいろな問題は補足していけばいい”というふうに考えていたこの建物の計画が全部できなくなってしまいました。ですから皆さんも用心をされた方がいいと思います。ものは完成すべき時には、ちゃんと完成させなくてはいけない。そして後から逐次、補強したり第二次工事でやったり、補完していくというようなことができない場合も起こり得るということを考えてやって下さい。私は痛切にこのことを感じています。

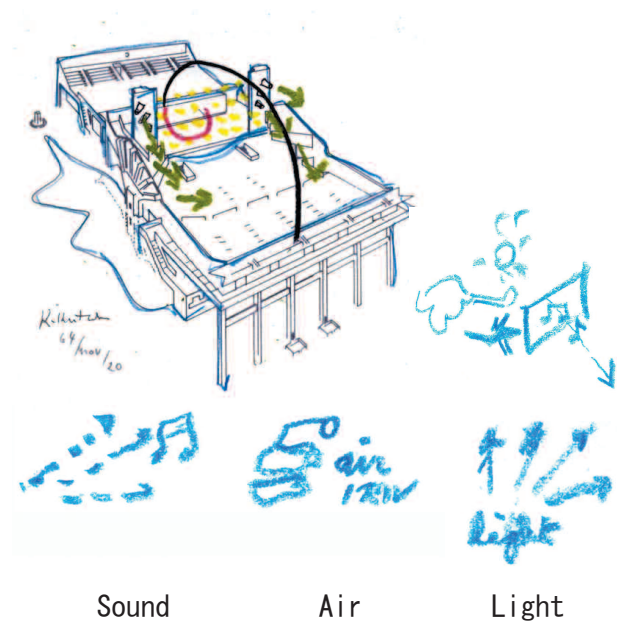
fig.40,41

そこで手紙で市長に「監理だけは一緒にやらせてもらわないと、これだけの難しい工事だから無理だ」ということをお話ししました。

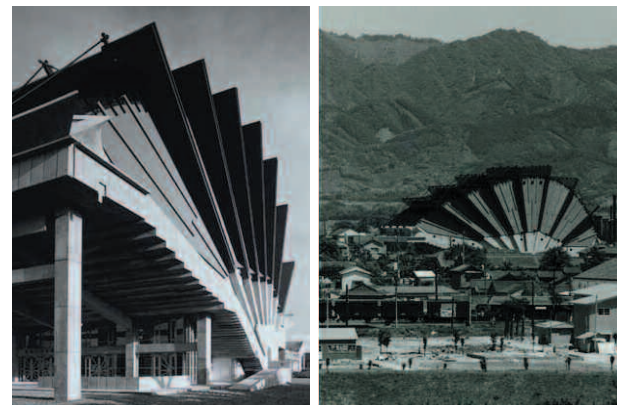
ところが案の定、外壁の施工のやり方で構造体に鉄板を取り付けるのに何を間違えたのか、内側に鉄板をつないでジョイントしていったことが後で分かりました。雨が降ると部屋の中に雨が洩ってくる。当たり前のことです。だけど、不幸な事件というのは次々に連鎖反応を起こします。あたかも設計が悪いかの如く記事にされました。だから情報の存在というのは、特に記者レベルでは、どんなところでどんなふうに宣伝されるか分からない。本当に恐ろしい時代になったと思いました。その市民会館は、実際にこれを引き取って、ぜひ使わせてくれという話が持ち上がり、南九州大学が今後の維持管理をやって下さることになりました。そういうことなら、少しは最初の考え方が反映されることになれば良いが、と私は思っています。しかしこれは容易なことではありません。この建物が残るようになって、大学が使うことになりましたので、協力をして、できるだけ初期の目的を達成できることに努めたいと思います。

Hypotheses 設計仮説

光・音・空気の統一



39



40,41 都城市民会館（1966）外観と全景（撮影：小山 孝）

fig.42

ところで国際的に見た時に、ちょうど同じ時に（ハンス・）シャロウンが「ベルリン・フィルハーモニー」を設計しております。それは偶然、両方が同じ考え方でスタートしているようです。

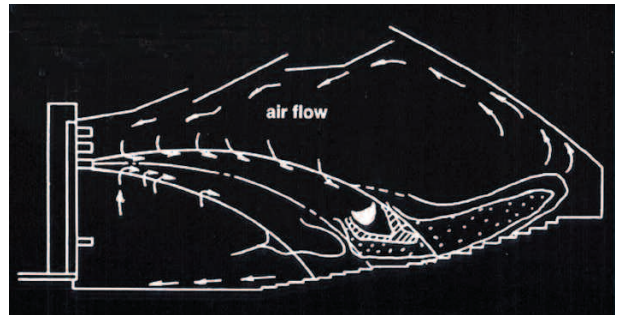
問題は、なぜこういうかたちをするのか。都城は、反射音は部屋の中で全部解決できるはずだから、音の反射にちょうど合うようなかたちのオーディトリウムを考えました。シャロウンさんも同じようにオーデを解決するために、透明の反射板をくっつけた。ここまでは反射板を付けましたが、反射板はここに付けば別にそんなものは付ける必要はないと考えていたが、やはり現実はそのいかない。そういうことで、音の伝播をどういうふうにしたらいいか。使い方の問題とも関係するんですが、設計仮説として音に良い天井のクロソイドカーブ処理を仮説として考えました。

ところが設計仮説でやったクロソイドカーブは、決してそうではなかった。つまり人間の耳の構造と一致しないんです。それから第2番目の仮説は光の伝播です。光もまた同じ方法で伝播して、ある特定のところから光を出せば、客席全体にうまく分布するはずだと考えました。それから3番目が、空気です。空気を吹き出すのに、この劇場の舞台の方から吹き出せば客席全般にうまく伝播できるはずだと考えました。

その3つの仮説を立てて設計をしたのです。ところがなかなかうまくいかなかった。ただ、空気だけは、ノズル型の空気の方法というのが、この劇場から始まったわけで、後で丹下先生が「代々木の競技場（国立屋内総合競技場・附属体育館）」でやっておられます。

それで先の光と音の問題に関しては、実はそれから後、ずっとうまくいかなかった。やはりベルリンも同じようにうまくいってないんです。それで仕方ないから透明ガラスの反射板をくっ付けて、何とかその問題をカバーしていました。今、シャロウンさんが生きていらっしゃれば、お互いにあの時はこうだったねと話し合いができて、非常に愉快だったと思います。

それだけ光と音と空気の扱い方というのは非常に難しいということです。絶えず実験で確かめて、それをもとにしてやらなければいけない。この音響問題は、NHKの技術研究所がサポートして一緒にやっています。出来た当時は全国で3番目の音響の良いホールのひとつだと言われ、随分、安心させられたんですが、実際そういうふうにはうまくいくには、解決すべき面があ



■42 イメージ図 客席に均等に音を行き渡らせるために三半器官（クロソイドカーブ）を採用

ります。

そのようなことで、光、音、空気を取り扱うのはなかなか簡単にはいきません。

5-7 ベルリン・フィルハーモニー

シャロウンが設計をしたベルリンのホールで、ただひとつ、私が非常に感心したのは、受付カウンターの扱いが上手です。シャロウンのベルリン・フィルハーモニーの建物の設計批評でそんなことを言う建築家は誰もいません。だけど、あそこでコンサートを聴けば分かります。入る時はどのカウンターでも受け付けをしてもらって、コートを脱いで預けて入ってあげばいい。三々五々と来ますからいいですね。だけどコンサートが終わって出る時です。日本中のホールの出口にあるカウンターの混雑というのは大変なものです。とにかく、そこで待たされます。ところがベルリンの場合は、ホールから出て、自分がコートを預けたカウンターに行くと、ハンガーは全部見える所に置いてあるので、コートを指差すと、すぐもらえるわけです。同じようなことを皆さんがやっていますから、ちっとも混まない。ですから、そのコンサートホールの出口は、全然混乱なしに出て行けるわけです。

また、中間に休憩時間がありますが、出てきた時に人々はどう過ごすか。ホールから三々五々出てきて、ホールでお茶を飲んだり、ワインを飲んだり、シャンパンを飲んだりしながら話をする。ベルリン・フィルハーモニーはそういう雰囲気がホールにあります。そしてそれだけの広さが一番最初の所にとってあるわけです。残念ながら日本のどんな良いホールも出口の所の納まりが全くうまくいっていない。それから演劇なり音楽なりについてしゃべったり、賞賛し合うような、そういう雰囲気が全くない。どうしてでしょうか。それは建築家がまるで音楽会に行かない種族だからでしょうか。やはり建築家は、実際にどういうふうに使われるか、そしてそこでどんな話を皆さんがするのか、それでどんなホールをつくらいいかということを考えなくてはいけない。そうすることが、建築家としてやらなくちゃいけないことであり、それは設計仮説を考えた重要なことの1つの例です。

Part-6

近年の活動

最後に将来についての話を2つして、それから審査と外国についての話も少ししたいと思います。

6-1 スカイガーデン

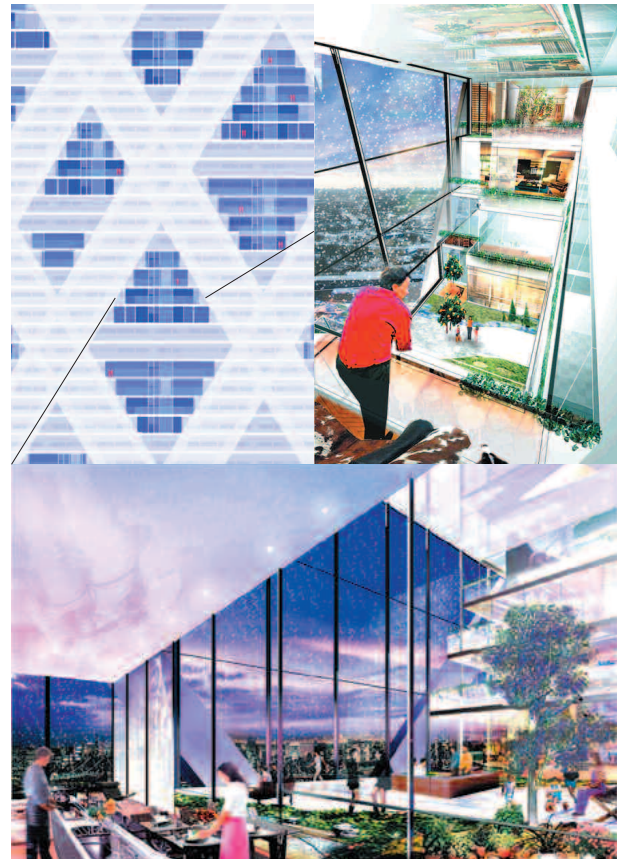
fig.43

モスクワで今、計画をやっております。いわゆる高層の50階建て、1,100戸の住宅が入る高級マンションです。モスクワのクレムリンのすぐ近くなんですが、非常に良い場所です。私は日本の建築家ですから、そこで日本の生活の良い所を実現するような計画をやりたいと申しました。向こうの人たちが「零下40度までいくからガラス張りの建築だと寒い。だから、ガラス張りはダメじゃないか」と言うので、大丈夫と言って、二重の、全部ガラス張りの建築の設計にしております。

そこで今やろうとしているのは、高層の住宅で自分の住宅のすぐそばに庭を持つということです。庭付きの住宅はグレードの高い高層住宅です。庭付きの住宅でどうい庭をつくるかという、「スカイガーデン」という提案です。住宅からすぐ出た所にスカイガーデンがあるわけです。この庭の優れたところは、自分の家の庭ですから好きな時に出てきて、そこでパーティーをやってもいいし、外を見ると下にクレムリンやモスクワの街並みが見えます。スカイガーデンというのは大変愉快的な環境になるものと思っています。

一番難問は空調設備です。空調というのは、空気を温めたり冷やしたりして快適な環境をつくらうという考えですが、こんな不経済な方法を平気でやっているわけです。だけど空調の空気は大体頭の上にかかったりする。これは不愉快なものです。もっと冷たい風が来て、それで体はポカポカと暖かいというのが良い。つまり熱線暖房とか熱線冷房を、これから考えなくちゃいけないんでしょう。そういう考え方をしてない。だからそれを宿題にして、これから設備のエンジニアと一生懸命やるわけです。

日本はそんなことは江戸時代からやっているんです。一番空気が良いのはどこかということ、吸う空気が冷たいのが気持ち良い。手をかざすとそこに熱を感じる神経があって、火鉢に手をかざして暖をとります。一番敏感な神経が手に集まっているからです。それで「日本のやり方をやってもらう」と言ったので、空調の人たちが大混乱しています。ただ、そういうようにして



■43 モスクワプロジェクト (2007~) 右上と下はスカイガーデンイメージ図

人間に良い環境をつくるのが良いことだと思っています。

その他に、皆さんがどういうふうにして幸福に、安全で快適な生活を送れるようなスペースを考えるかということがあります。よく海外に対して日本は、地震の経験がものすごくあるから、そういう安全性についても一番の先進国だと言っておりますが、早くそうしてもらいたいものです。日本の構造家は地震が来ても何が来ても全然平気です、ということにしたいものです。

6-2 評価について

評価をどういうふうにするかという時に、どういう作品が良いのか。私は海外で随分、審査をやらされているんですが、その時にやっぱり“方法論”が問題になるわけです。格好はちょっと良さそうな、グニャと曲がったような建物があります。それから斜めになったような建物があります。そういうものを審査する時に、格好が良いからというので良いか悪いかを判断するというだけではダメです。その格好を支えている技術はどうなっているか。そしてそれは非常に面白い技術か。では、その技術が良ければ良いのか。良くないですよ。その例として私はギロチンのことをよくお話ししてきました。つまり、ギロチンというのは技術が良ければ首がスパッと切れる。スパッと切れるギロチンがあれば良い設計デザインなのか。そうじゃない。ギロチンの必要な社会が人間社会にとって、本当に幸福な未来社会なのかどうか、ということを考えなくては行けない。最終的に本質的なそういう問題をちゃんと考えて、この作品が良いか悪いかということ判断しなくてはならない。そういうことで私は今、ベトナムの審査をやり、台中の海外コンペの審査をやり、それからまたロシアの審査をやったりしております。大体において方法論を通して審査をする人が少ないものですから、いつも最終的に「じゃあ菊竹さん、どう判断しますか」なんて言われて、一番最後に必ずお鉢が回ってきて、最終の決を下すことになります。そんなことで、これからもしばらくは審査員をやらなくちゃいけないんだろうと思います。皆さんも海外に行った時、自分の考え方を自分がやってきていることを通してちゃんと判断し、意見を述べることを、ぜひ心がけていただきたいと思います。日本の方々は非常に優秀ですから、各地において信頼を受けておられます。

6-3 ミースについて

ミースの話は、ユネスコか何かの専門家会議だったんですが、ユネスコというのはヨーロッパでヨーロッパを“これから世界一にするためにどうやるか”という、20数年やってきている組織です。その組織に呼ばれて、「東西文化の交流」というテーマで会議が行われました。日本の建築物を勉強するのに日本のかつての都の職員の人たちが皆さん、「世界中で一番良いのはドイツだ」と言うので、ドイツに勉強に行って、日本の木造の建築をコンクリートに変えた。それを（ブルーノ・）タウトが日本の学校建築を見て、「これは世界一だ」と言って褒めて下さった。だけど褒めたのはそうじゃなくて、ドイツが良いとお褒めになったんですよ。翻って、ではドイツはどうか。ドイツは神さまと言われているミースがおやりになったことについて話しました。私が非常に好きで大変尊敬している建築家です。しかしミースがグルーミーな建築から、ある時突然、開放的な建物を「バルセロナ・パヴィリオン」でおやりになった。私はそれを見て、これは日本建築の影響大ではないかと思い、会議の席上で、「これは日本建築の真似じゃないか」と申し上げました。しかし大胆ですね。そういう人たちがいっぱいいる中で、検証もろくにしないで、こともあろうに世界中の人たちが尊敬するミースの作品、ミースの設計を、「日本の建築の真似だ」なんて言う人はそれまで誰もいなかったようです。私の“ミースが日本建築の真似をされた”という話は大騒動になりました。ところが会が終わって皆さんが「それはそうだ」と言ってこられた。事実こういう証拠があると本も見せてもらいました。更に、バルセロナ・パヴィリオンをやった時の事務所のチーフがベルリンでご存命で、その人の言葉も聞きました。要するに、いわゆる本音で自分が日ごろ考えていることや、その延長で述べるということが、これから大切になってきていると思います。きっと日本の若い方々は、今後、自分の考えを述べる機会が多くなってきますが、参考にさせていただければと思います。

いろいろお話は飛びましたが、建築家の取り挙げる仕事は非常に広範になって、そして何でもやらなくては行けない。ここだけしかやらなくてもいいとか、ここは建築家では構造家だとか、そんな区別をつけるのはつける方がおかしい。建築家は、こと環境について、その統合をやらなくてはならなくなってきたこと

を最後に申し上げて、私の話を終わりにさせていただきます。“か・かた・かたち”の方法論で設計仮説から構造・設備、更にその管理運営まで多岐多様な問題にどう対応していくか。これからの世界的に面白い世紀になってくると思われる。その中で、「日本様式」が注目されてきている時、方法論のお話ができただことは私の光栄です。最後にこのような機会をつくっていただいたINAXの皆さまに御礼と感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。